

一八八四年九月十九日(金)

ドックネーシヨル  
南神村において、マヘンドラ、ラカール、ラディカ・ゴースワミーなど  
信者たちと共に

マヘンドラたちへの教訓——大佐キャプテンの信仰と父母への孝養

聖ラーマクリシユナは、ドックネーシヨル南神村のカーリー寺内のあの馴染みの部屋で信者たちと共に坐っておられる。秋である。金曜日、一八八四年九月十九日。ベンガル暦一二九一年アツシン月四日。時間は午後二時ころ。今日はバッドロ月のアマヴァーシヤ新月、マハーラーヤ(ドウルガー・プー ज्याに先立って行われるお祭り)。マヘンドラ・ムコパッタエ氏と彼の弟プリア・ムコパッタエ、校長、バブラーム、ハリシユ、キシヨリー、ラトウたちがいて、ある者は床に坐り、ある者は立ち、ある者は部屋の中を行ったり来たりしている。ハズラーさんはベランダで坐っている。ラカールはバララームといっしょに、まだプリンダーヴァンに滞在中である。

聖ラーマクリシユナ「(マヘンドラはじめ信者たちに向かつて) カルカッタのキャプテン大佐の家へ行つたよ。夜おそく帰つて来た。

大佐は実にいい性質だねえ！あの信仰の態度！小さい下衣をつけて、アレイライ 献灯をするんだ。先ず三つの灯芯の灯明をゆらせて、キキフテン 献灯し、そのあとで、一つの灯芯で灯明をアレイライ 献げる。最後にしょうろう 樟脳を燃やして供える。

そのあいだ、全然口をきかない。わたしに坐るようにと、身振りですすめたよ。

礼拝するときは、目が蜂に刺されたように赤く膨らむんだよ。

歌は苦手のようだが——でも、スタグ 讃詞をきれいに誦む。

お母さんのそばでは一段低いところに坐って——お母さんは座台に坐るんだ。

お父さんはイギリスの軍曹でね。戦場では片手に鉄砲を持って、片手でシヴァを拜む。従者けらいがシヴァの像をつくってくれた。シヴァを拜まないうちは水も飲まない。六千タカの年俸をもらっていたよ。

お母さんを時々、カーシー（ベナレス）に行かせてあげるんだ。そこでは十二、三人の召使いをつけてある。ずいぶんと費用のかかることだね。ヴェーターンタ、ギター、バーガヴァター——大佐は暗記しているんだよ！

彼は、『カルカッタの紳士たちは、ヒンドゥー教徒としての勤めをいい加減にしている』と言っている。以前まえにハタ・ヨーガをやっていたので、わたしが三昧や前三昧に入ると、頭を手でなでてくれるんだよ。（訳註——ハタ・ヨーガの知識から、タクールの三昧を解くためにウァイク 靈気の流れを変えようと試みて、頭を手でなでたものと思われる）

大佐の奥さんは、もう一人の神様クメールも拜んでいる——ゴバラ（赤子のクリシュナ）だ。こないだ会ったときは、それほどこちん坊には見えなかったよ。奥さんはギターなんかの聖典も知っているんだ。

信心深い夫婦じゃないか!

わたしが食事の席に着くと、いつも手に水を注いで洗ってくれたよ。木でできた爪楊枝つめようじまで用意してくれていたよ。

山羊ヤギのカレーをつくってくれた。大佐は十五日保もつと言ったんだが、彼の奥さんは、『いえ、いえ、七日しか保もちませんよ』と言ったつけ。でも、とてもうまくいったよ。料理はみな、ほんの少しずつ盛ってくれた。わたしがもっと食べるものだから、近ごろはたくさん盛ってくれるよ。食べ終わると、大佐か奥さんがウチワで扇いでくれる」

〔ジャン・バハドールの息子たちが大佐といっしょに訪れたこと(一八七五—一六)——ネパール〕  
このプラフマチャーリニーがギータ・ゴウヴィンダをうたう——私は神の侍女

「あの夫婦は、ほんとに信仰があつい。サードゥたちを大そう尊敬する。西の方(パンジーヤブヤウツタル・プラデーシユ)の人たちは、よくサードゥを信仰するよ。ジャン・バハドールの息子特がここに来たことがある。外でズボンズボンを脱いでから部屋に入ってきたんだよ。(訳註——ズボンズボンを脱ぐ行為は、世俗世俗の穢けがれを持ち込まないことを意味する)

大佐といっしょに、あの国(ネパール)の娘が一人来た。熱心な信仰者で結婚していなかった。ギータ・ゴウヴィンダの歌を暗誦あんじゆしていたよ。この娘の歌をきいて、ドワリカ(原典註)パーブさんたちが入ってきて坐りこんだ。わたしは、『お前の歌を聴きたがつているんだよ。みんな、いい人たちだよ』と言った。彼

女がギータ・ゴヴィンダの歌をうたっている間に、ドワリカさんは感じ入って涙を拭ぬぐいたんだ。どうして結婚しないのかと聞かれて娘は、『神様の侍女が、今さら誰に仕えられますか?』と答えたよ。娘を取り巻く人たちはみな、女神様デーヴィだと言つて大そう尊敬している——聖典に書いてあるように。

(マヘンドラたちに向かつて) あなた方、ここへ来て何かためになりますか? 何か役に立つなら、わたしはとても嬉しいんだが——。(校長に向かつて) どうして此処に人が来るんだろう? 読み書きもろくに出来ないものところに——

校長「本物の牛や牛飼いの少年たちがブラフマーにさらわれてしまった後、クリシュナご自身が牛や牛飼いの少年になりました。そんなことを知らない母親たちは、息子たちを見つけた後は、ヤショーダーのところへクリシュナに会いに行くのをやめてしまったのでございます。(訳註) 母牛たちも、仔牛たちがメ

(原典註1) ドワリカ・バーブ——マトゥール氏の長男。一八七七年(ベンガル暦一二八四年ボウシユ月)に四十才で死亡。大佐が初めて来たのは一八七五〜六年で、ギータ・ゴヴィンダの朗詠は、おそらく一八七五年から一八七七の間に行われたと思われる。

(訳註1) クリシュナ自身が牛飼いの少年になって下さってからは、それまでクリシュナに会うためにヤショーダーのところに行っていた母親たちは、クリシュナのなっている子供たちに会ったあとは、ヤショーダーの許に行かなくなつた。クリシュナのなっている仔牛に会つた母牛も同様であつた。神が顕現されているところでは非常に満ち足りた気持ちになり、改めて神をさがし廻る必要がなくなるからである。校長は、神ご自身が聖ラーマクリシュナとして顕れているので、それで多くの人たちがタクールの許に集まることを、神話を引用して説明したものとと思われる。

エメエ鳴くのを聞くと、そのあとに付いて行ってしまったそうでございます」

聖ラーマクリシュナ「それがどうした？」

校長「何もかも、神ご自身がなされるのではありませんか——これほど人を引きつけるのも、神の実体がここにあればこそ、人々の心を惹きつけるのです」

〔クリシュナリーラーの説明——ゴープীর愛——着物を盗んだ意味〕

聖ラーマクリシュナ「これがヨーガ・マヤーの人を魅了する力なのさ。魔法をかけなさるんだ。ラディカは、腕に仔牛を抱いた牛飼いのスボルに化けた。そうしたら、たいそう恐れていた小姑こじょうとのジャティラが祝福してくれた。ヨーガ・マヤーのもとに避難すれば、ジャティラさえもが祝福してくれるんだよ。(訳註、ヨーガ・マヤー——サットヴァ、ラジャス、タマスの三つの性質ツグを通して行われる造化力シヤクティの働き)

ハリの活動はすべて、ヨーガ・マヤーを通して行われるんだよ！

ゴープীরたちは、夫以外の人(クリシュナ)を愛した。クリシュナのためにゴープীরたちは愛のよるこびに浸っていた。自分の夫のためだけなら、これほど夢中にならないものだよ。誰かが、『ホラ、ご主人のお帰りですよ』と言っても、『あら、そう。料理がしてあるから、自分で勝手に食べるでしょう！』などと気のない返事をする。でも、もし立派な男——気が利いて、美男で、教養のある男——の話なら、走って見に行つて、物影からのぞき見るだろうよ。

『あの御方を見たこともないのに、どうしてゴープীরたちのように夢中になることができよう？』名

を聞いただけで夢中になるほどに——」と疑うかも知れない。

知らなくても、名をきいただけで心が惹きつけられて、それに夢中になる場合もあるんだよ」

一人の信者「わかりました。ときに、クリシュナがゴーピーの着物を盗んだのは、どういうことを意味しているのでございますか？」

聖ラーマクリシュナ「八つの枷<sup>かせ</sup>——ゴーピーたちにはこの世の八つの足かせ<sup>訳註4</sup>のうち、ただ一つだけが残っていた——恥ずかしいという気持ち。だよ。だから、あの御方はその足かせを外して下さっ

(訳註2) ジャティラは意地悪をして、ラディカがクリシュナに会うのを邪魔ばかりしていた。ところが、ヨーガ・マヤーによってラディカはクリシュナの牛飼いの仲間であるスボルに変身させられた。すると、ジャティラはスボルになっているラディカを祝福してくれた。ヨーガ・マヤーは何でも出来ることの例えである。

(訳註3) ゴーピーたちは冬の一か月間、クリシュナが自分の夫となるようヤムナー川で沐浴しカーティヤーヤニー女神に祈っていた。祈りの最終日、ゴーピーたちが川岸に衣服を脱ぎ捨ててヤムナー川でクリシュナを讚美しながら遊び戯れていると、クリシュナはゴーピーたちの衣服を盗んで木の上に登ってこう言った——「お前たちは全裸で水浴して神を冒瀆した。そこで手を合わせ、頭を下げて拜め。そうすれば服は返してやる」と。ゴーピーたちが命じられた通りにすると、クリシュナは服を返してやった。ゴーピーたちは羞恥心を奪われ、からかわれ、衣服まで奪われたのに、それを恨むどころか、クリシュナと一緒にいられる幸せを感じたのであった。(バーガヴァタ・プラーナ 10・22)

(訳註4) 八つの足かせ——(1) 憎しみ、(2) 恥ずかしいと思う気持ち、(3) 恐れ、(4) 階級<sup>カースト</sup>の誇り、(5) 家柄の誇り、(6) 品の良さの誇り、(7) 悲しみを引きずること、(8) 他人のあら探し

「たんだ。神をつかんだら、足かせは全部なくなる」

「ヨーガの道を外した人は残った経験をし終わってから神をつかむ」

「(マヘンドラ・ムクジエーたちに向かつて) すべての人が神に引かれるわけではないよ。特別の器量をもった人たちがそうなるんだ。前生から受け継いだ力やいい性格(サムスカーラ)でそうなるんだよ。そうでなかったら、バグバザールにあれば人がいるのに、何故あんなたちだけが此処こゝに来るんだい？ 純粹でない奴らは来やしないさ。マラヤの風に当たったら、木といふ木はみんな白檀になるが、ただ、シムロとアスワッタとバナヤンと、それからあと幾本かの木は白檀にならない。

あんな方は金に何の不自由もない。ヨーガの道をしくじった人は恵まれた家庭に生まれて——また、神を求めて修行するようになる」

マヘンドラ・ムクジエー「なぜ、ヨーガの道から外れるのでございましょうか？」

聖ラーマクリシュナ「前生で神を求めて修行しているうちに、突然、官能の誘惑にかられた。これに負けてヨーガの道を退転するんだよ。そういう人は、次に、さっき言ったような生まれ方をする」

マヘンドラ「それからは、どんなふうにすればよろしいのでございますか？」

聖ラーマクリシュナ「欲望があつて、経験したいという衝動があるうちは解脱できない。だから、やりたいことは何でもおやり——食べたり、着たり、女と寝たり、大いにやんなさい。アハハハハハ、あんなはどっちがいい？ 正式に結婚するのと、気ままにやるのとどっちだね？」(校長とムクジエー

笑う)

自ら語る経歴——タクルのいろんな望み

〔以前の話し——カルカッタのナテの庭で——ガンガー水浴〕

聖ラーマクリシュナ「何かしたいという気持ちをも、そのままにしておくのはよくない。だからわたしは、自分の心に浮かんだ希<sup>ぞ</sup>みは何でも、すぐ実行するようにしたものだよ。

バラバザールで色のきれいな菓子(サンデシユ)を見て、食べてみたいと思った。そう言ったら人が持ってきてくれたので、しこたま食べたよ——後で腹をこわしたがね。

子供のころ、ガンガーで水浴びしているとき、一人の少年が腰に黄金のバンドをしめているのを見た。こんな境地になつてからそのことを思い出して、ふと自分も、一度あんなバンドをしめてみたいなど思った。ほんの少しの間しか、しめていられなかったよ。バンドをしめたら、体のなかで何ともいえない嫌<sup>いや</sup>な靈氣<sup>ヴァイユ</sup>がもくもくと下から上にのぼつてね——きつと、金が体にさわつたせいなんだね？ すぐ外して放り投げてしまった。さもなけりや、バラバラに引きちぎつてしまったらうよ。

ダネカリーのカイチュールや、クリシュナガールのサルバジャといったよその町の名物菓子を、全部味わつてみたいと思つたこともある」(一同大笑)(訳註、カイチュール——粗<sup>む</sup>く挽いた炒り米を丸めて麦芽糖で煮た菓子、サルバジャ——牛乳に張つた膜を揚げた砂糖菓子)

〔以前の話し——シャンブーとラー ज्या・ナーラーヤナのチャンディーを聞く——タクルのサードウ奉仕〕  
 「シャンブーの歌うチャンディーの歌(聖典、デーヴィー・マハートミヤの朗詠)が聞きたかつた！ それを聞いてしまつたら、こんどはラー ज्या・ナーラーヤナの歌うチャンディーが聞きたくなつた。それも聞いたよ。

あのころ、大勢のサードウたちが寺にやつてきた。あの人たちをもてなすために、貯蔵室のようなものが別に一部屋欲しいと思つた。シエジヨさん(マトゥール氏)がつくつてくれたよ。その貯蔵室からサードウたちに、食糧でも、燃料でも、自由に出してあげたものさ。

いちど、たいへんぜいたくな金銀で縫い取りした衣装を着てみたいという希望が湧いた。それから、銀の水ギセル(ハプル・バプル)でタバコが吸つてみたい、と。シエジヨさんが、金ピカの衣装も、銀ギセルも、みんなよこしてくれた。衣装も着た。銀の水ギセルもいろんな格好で吸つてみた。右に傾けたら、左に傾けたり、上向きにしたり、下向きにしたりして——。そして、自分の心に言いきかせたよ——。コレ、心よ、これが銀ギセルでタバコをのむということだぞ！ それから、キセルを放り投げた。金ピカ衣装もちよつとの間着で、脱ぎ捨てたよ——。足で踏みつけて。おまけにベツベツとツバを吐いて、言いきかせたよ——。これがぜいたく衣装だ！ この衣装はラジャス性を募らせるだけだ！——

〔プリンダーヴァンでのラカールとバララム——以前の話し——ラカールの最初の法悦境(一八八一年)〕  
 ラカールはバララムといっしょにプリンダーヴァンに行つてゐる。はじめのころ、聖なるプリン

ダーヴァンの地に大変感激して、あれこれと土地の模様をくわしく手紙で知らせてよこした。校長への便りにはこんな文句が書いてあった。「ここは、この世で最高最上の土地です。ぜひあなたもおいで下さい。孔雀たちは楽しみに踊り、また、法悦の歌と踊りに明け暮れ、いつも歓喜にあふれています」

その後、ラカールはプリンダーヴァン熱(その当時流行った熱病)にかかって、熱を出して寝ている。タクールはそのことで大そう心配しておられ、彼のためにチャンディカー(ドゥルガー女神の別名、チャンディーとも言ふ)に誓いをたてられた。タクールはラカールのことをお話になる。「ここに坐つてわたしの足をさすっているうちに、ラカールは最初の法悦境パーヴェッになつたんだよ。パーガヴァタの学者が、この部屋でパーガヴァタの話をしていた。その話をさきながら、ラカールは時折身震いをしていたが、その後でまったく身動きをしなくなつた。

二度目のパーヴァはバララムの家で——パーヴァになつて床に倒れてしまつた。

ラカールは、形ある神(人格神)を信仰する部類に入っているから、無形の神(非人格神)の話が出ると立つて行つてしまふ。

あの子のために、わたしはチャンディカーに誓いをたてたよ。あれは、何もかもわたしに任せきつてゐるんだ——家や親戚とすっかり縁を切つて！ 嫁のところの時々行かせたのは、このわたしなんだよ——まだ少し経験平、カが残つていたからね。

(校長を指して)プリンダーヴァンからこの人のところへ、とてもいい処だと便りをしてね——孔雀たちが踊っているつて。今は孔雀どころじゃ——。ほんとに心配させるよ！

あそこにはバララームがいっしょにいるからね。アハ—！バララームは実にいい人だ！わたしのために、あっち(オリッサにある家)に行かないんだよ。兄さんが仕送りをとめて、手紙で言っただけなんだ——お前は帰ってきてこっちに住め。そっちで無駄使いばかりしてはダメだ」と。でも彼は聞きやしない——わたしに会いたいからと言っただけ。

何ていい性質だろう！夜昼なく神様にお仕えしている——庭番たちに年中花輪をつくらせているんだ！金を節約するんだといって、四ヶ月ほどプリンダーヴァンに住むそうだ。二百タカ仕送りしてもらっているんだよ」

〔以前の話し——ナレンドラのために泣く——ナレンドラと初会見(二八八一年)〕

「なぜ青年たちを好くのか、わかるかい？あれたちのなかには、まだ女と金が入りこんでいないからだ。あの青年たちは、永遠の完成者だとわたしは見ている！」

ナレンドラがはじめて来たときは——何だかうす汚い布(チャドル)を巻いていたが——でも、目と口を見たら、内部に何か持っている」と感じたよ。あのころはまだ、それほどよく歌を知らなかったようだ。一つ、二つ、歌ったがね——

心よ、自らの住居に戻れ」と、ああ、わが日々は空しく過ぎゆくを歌った。

来たときは部屋は人でいっぱい。でもわたしは、あれの方ばかり見据えて話をしたものだ。あれが、『この方々とお話をして下さい』と言うので、それで、他の人と話したもののさ。

ジヤドウ・マリツクの別荘で、わたしや泣いたものだ——あれに会いたくて気も狂いそうになってね。ここでもボラナートの手をにぎって泣いたよ！ ボラナートは言った——『カーヤスタの青年ひとりのために、あなた、そんなふうになさる必要はないでしょう』と。おデブのバラモン(訳註5)(フランクリシユナ氏)がいつか、手を合わせてこう言ったよ——『あなた様、まだそれほどの学問も教養もないあの若者のために、どうしてそれほどソワソワなさるのですか？』

バヴァナートとナレンドラは、まるで一組の夫婦のようだね！ だから、バヴァナートに、『ナレンドラの近くに住め』と言ってやったよ。二人とも無形の神を信じているんだ』

〔出家のきびしい戒律——捨離——ゴシユパラ派の修行〕

「わたしは青年たちに、女のところに長居をしたり、度々行き来をしてはいけないと教えてある。

ハリパダは一人のゴシユパラ派の女につかまってしまった。その女は母親のような態度をとった。ハリパダは若いので何も気がつかない。ああいう女たちは若い男をみると、そういう態度をとるんだよ。

聞けば、ハリパダはその女のヒザで寝るそうだ。それに、女は自分の手で食べ物をお口にに入れてやる

(訳註5) カーヤスタ——高位のカーストで、俗世間に順応性があることで知られている。イギリス統治時代、多くのカーヤスタは英語を身につけ、子供に英国式の教育を受けさせた。

そうだ。そういうことはいかん、と彼に言つてやらなけりやならない。あの母性愛らしい態度から、墮落につながるんだからね。

あの宗派の女たちは男といつしよに修行する。男をクリシユナと見なすんだよ。ラージャ(愛人)・クリシユナというんだ。グルは、『ラージャ・クリシユナを見つけたか?』と聞く。女は、『はい、見つけました』と答える。

いつか、その女が此処へ来たよ。様子をよく見たが、わたしは大そう気に入らなかつた。『ハリパダをどう扱おうと勝手だが、妙なまねはするな』と言つてやったよ。

青年たちは今、修行の段階だ。今はただ、捨てることだ。出家は女の絵も見ようとするな。わたしはあれらに言い聞かせている——『信者の女とでも、いつしよに坐つて話なぞするな』と。立つたまま、ちよつと話せばいい。完成者コンプレッテッドといわれる人でも、この心掛けが必要だよ。自分の用心のため、それに、みんなのお手本になるためにもね。わたしだって、女の人が来た場合は、少しするとすぐ、『あんた方、お詣りまいしておいで』と言つて出て行かせる。それでも出て行かないときは、自分で出て行くよ。わたしのやり方を見て、皆がお手本にするだろう」

〔以前の話し——一八八〇年にフルイ・シャームバザールに行ったこと——神の化身の持つ吸引力〕

「ときに、あの青年たちがそろつて此処にやつて来たり、それに、お前たちがみんなしてやつてきたりするのは何故かわかるかい? この(わたしの)なかに、何か自分でもどうしようもないものが住ん

でいるからだよ。そうでなけりゃ、みんなが引き寄せられて来るわけがない。

郷里くわにで、フリダイの家（カマールブクルの近く、シオル村）にいたとき、シャームバザールに連れていかれた。その村に入る前に、私は聖チャイタニヤの幻を見た。村で聖チャイタニヤの信者たちに会うんだな、とわかつたよ。七日七晩、黒山の人ばかりだった！ ただ、ただ、キールタンを歌い踊っていた。塀の上にも人！ 木の上にも人だ。

ナタバル・ゴースワミーの家に泊まっていた。そこも、夜昼なく人が集まってきた。わたしは朝方逃げ出して、織職人の家に行って休んでいた。そうしたら、そこにもすぐ皆がやってきてね、みんな長太鼓コトやカルタル（小シンバル）を持って、またまた、タクテ、タクテ、と太鼓コトの音だ！ 午すぎひるごの三時ころにやつと飯めしになったよ！

七度死んで、七度生き返った人が（タクールが三昧に入っては下りてくることを指す）来た！ —— こんなウワサが広がった。わたしが日射病にならないようにと、フリダイが原っぱの木かげに連れ出したものだよ。そしたら、またそこに蟻あまの行列みたいに人がやってきた！ また長太鼓コトとカルタル。タクテ！ タクテ！ フリダイが腹を立ててこう言った。—— 『私たちがキールタンを聞いたことがないとしても思っていないさるのかい？』

その土地の説教師ゴウライヤンたちがケンカ腰で押しかけてきた。連中がとるべきお賽銭を、わたし等が横取りするかと思つたんだね。見ていると、わたしは着るもの一枚、糸一本さえ手にとろうとしない。誰かが、『この方は、ブラフマン智者だ』と言った。すると説教師たちはわたしを試ためそうとした。一人が、

『どうして、数珠もかけず、ティラク(額の印)もつけないのですか?』と聞いた。ほかの人が、『ココナツツの枯葉が自然に木から落ちるようなものですよ』と答えた。わたしがいつも言う『ココナツツの枝のたとえ話は、そのときおぼえたんだよ。真理の智慧が身についたら、形式的なものは自然にとれてくる。』

遠い村からも人びとが集まってきた。そして夜もそこにいた。泊まっていた家の中庭に、夜になると女たちが大勢横になって寝ている。夜、小便をするのにフリダイが外に連れ出してくれたら、『ここ(中庭)でなさつたら?』と女たちに言われたよ。

神の化身アウァターラの持つ吸引力というものを、わたしはあそこ(シャームバザール)で理解したよ。神ご自身がこの地上においてになったときには、人々はヨーガ・マーヤーによって引き寄せられるんだ。ちょうど、魔法にかけられたようにね!』

### タクール、聖ラーマクリシュナとラディカ・ゴースワミー

ムクジェー兄弟はじめ大勢の信者たちとお話をなさっているうちに、時計は三時を打った。ラディカ・ゴースワミーが入ってきてあいさつをした。彼はこのときはじめて、タクール、聖ラーマクリシュナにお会いしたのである。年令としは多分三十才前後だろう。ゴースワミーは席についた。

聖ラーマクリシュナ「あなた方一族は、アドヴァイタ・ゴースワミーの子孫ですか?」(訳註、アドヴァイタ・ゴースワミー―聖チャイタニヤの最も親しかった仲間)

ゴースワミー「はい、おっしゃる通りでございます」

それを聞くとタクルルは、このゴースワミーに向かって合掌なされた。

〔ゴースワミーの血統とバラモンを敬うこと——偉大な魂の子孫として生まれること〕

聖ラーマクリシュナ「アドヴァイタ・ゴースワミーの子孫——徳を受け継いでいなさる！

甘いマンゴーの木には甘いマンゴーがなる（信者たち笑う）。酸っぱいマンゴーはならない。まあ、畑のよしあしで、実の大きい小さいはあるがね。そうじゃありませんか？」

ゴースワミー「（うやうやしく）は、私は何も存じません」

聖ラーマクリシュナ「あなたが何と言おうと、ほかの人たちが放っておかないでしょう？

バラモンというものは、たとえどんなに欠点があっても、ゴートラだということでは皆から尊敬される。（校長に向かって）ほら、サンカチーラの話をしてごらん！」（訳註、ゴートラ——バラモンのカーストが四十九に細分化したもので、それぞれが有名な聖仙の系族である）

校長が黙ったままだいるので、タクルルは再び話をはじめられた——

聖ラーマクリシュナ「祖先に偉大な魂があれば、そのお方が引つ張つて下さるよ。たとえ欠点の多い子孫でもね。ガンダルヴァたち（音楽を好む半神半獣の存在）がカウラヴァたち（ドゥルヨーダナ兄弟たち）をつかまえたが、ユディステイラが行つて彼等を解放してやった。ドゥルヨーダナがあればほど敵対行為をして、彼のためにユディステイラは森に追われたほどなのに、それでも彼を助けなすつた

んだよ!  
(訳註6)

それに、たとえウソでも宗教家の装束をつけていれば、それだけでも敬意を払わなけりやいけない。その装束を見ると真理かみのことを思い出すからね。チャイタニヤ様デレツアはロバに僧衣を着せて、その前にひれ伏して拝みなすつた。(訳註、装束——宗派を表す装束)

サンカチーラを見ると、なぜおじぎをするんだらう？　カンサに殺されそうになったバガヴァティー(女性創造神、マアの別名)は、サンカチーラ(鳥の名)になつて飛び上がりお逃げになつた。だから今でも、サンカチーラを見ると、皆がおじぎをするんだよ。(訳註7)

〔以前の話し——コヤル・シンのチャナクにおけるタクルへの礼拝——タクルの忠誠心〕  
Prayerful Loyalty

「チャナクの小队宿舎にイギリス人が入ってくるのを見て、セポイ(土民兵)たちは敬礼した。コヤル・シンがわたしに教えてくれたよ——『この国はイギリスに支配されているので、イギリス人に敬礼しなくてはならないのです』と」

〔ゴースワミーに宗派根性を非難する——シャクティ派とヴィシヌ派〕

「シャクティ派はタントラ(密教)の教義に、そして、ヴィシヌ派はプラーナの教義に従っている。ヴィシヌ派の人は、修行の内容を話してもいいんだよ。タントラでは、すべて秘密にしておく。だからタントラを奉じている人は、どうもよくわからない。」

(ゴースワミーに向かって) あなた方はとても結構ですね——たくさん誦經ずきょうをしなされるし、たくさん神の御名を唱えていなされるし——」

ゴースワミー「(謙遜に) はい、私どもはそれくらいしか出来ませんので! 私はまこと下等な罪深い人間でございます」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハ、謙遜していなされる。まあいいでしょう。でも、こんな考え方もありますよ——『私はハリの名を称えている。私は今さら、罪などにかかわりはない!』と。一日中、私は罪人です。私は下等な人間です。私は下等な人間です』と言い暮らしていた

(訳註6)「マハーバーラタ」からの引用。ドゥルヨーダナとのイカサマ賭博に負けたパインドゥ一家は、約束通り森に隠遁かくとんしていた。勝ったドゥルヨーダナは自分たちの栄華を見せつけようと、軍隊を率いてパインドゥ一家のいる森に入った。そこでガンダルヴァの軍勢と遭遇し戦いとなる。ドゥルヨーダナたちは負けて囚われの身となったが、家来が逃げ出してパインドゥ一家に助けを求めた。ほかの者は天罰だと言ったが、パインドゥ兄弟の長男ユディステイラは、「親族の法は滅びていない。庇護を求めてきた我々の一族を救うために立ち上がれ」と言って、ドゥルヨーダナたちを救い出した。(『マハーバーラタ・第三巻(森林の巻) 第二二四章—二三五章』参照)

(訳註7) 魔王カンサは信仰深い妹のデーヴァキと夫のヴァスデーヴァの子供が自分を滅ぼすという予言を聞き、その子供らを次々と殺したが、第七児バララマと第八児クリシュナは難を逃れた。幼児クリシュナは、牧人ナンドとその妻ヤショーダーとのあいだに生まれた女の子(バガヴァティー)とすり替えられ魔王カンサに引き渡されたが、幼女バガヴァティーは、サンカチーラという翼に巻き貝のような模様のある鷹に似た鳥の姿になって大空へ逃げ出した。その後、成長したクリシュナは魔王カンサを滅ぼした。

ら、ほんとにそうなるよ。信念が足りないね！あの御方の名をこれほど称えているのに、まだ、罪、なんて言っているとは！」

ゴースワミーは驚いて、声もなくこの言葉を聞いている。

〔以前の話し——プリンダーヴァンでヴィシュヌ派の僧衣くわいをうける（一八六八年）〕

聖ラーマクリシュナ「わたしもプリンダーヴァンに僧衣べいを持って行って、十五日間ほど着ていた。（信者たちに向かつて）わたしはあらゆる宗派の修行をしたよ。それぞれ、わずかな日数だがね。そうしなければ心が安まらなかった。

ハハハハハ、どんな修行でもやってみた。だから、どの道も認めるよ。シャクティ派も敬意をもって受けられるし、ヴィシュヌ派も認めるし、それに、ヴェーダーンタ派の言うことも認める。だから、此処にはあらゆる宗派の人たちが来る。皆が、この人は自分たちと同じ考えだと思っている。近ごろのブラフマ協会の考え方も認めている。

一人の男が、一つの染色桶そめおけを持っている。その染桶のすばらしいところはね、そこに布を浸してさえおけば、どんな色にでも自分の好きな色に染まるということだ。でも、ある利口者がこう言っていたよ——『あなたが染めようとしている色を私に分けて下さい』（タクールと一同、大いに笑う）

一つのものだけ、かつぎまわる必要はないだろう？それでは、これこれの宗派の人は来ないだろう。なんていう気づかいはしたこともないよ。誰が来ようと来まいと、私はちつともかまやしない。人を

思うように動かそうなんて、これっぽっちも考えたことはないよ。アダル・センが高い地位につけるようにマーにお願いしてくれと言って——だめだったがね、そのことで彼がどう思おうと、わたしにや関係ないさ！」

〔以前の話し——ケーシャブの家で無形の神を感じることに——ヴィジャイと共にアーリアダハのガダーダルの学校に行ったこと——ヴィジャイの徳性

〕「それから、ケーシャブ・センの家に行つて、わたしは又別な気分になった。あの連中は、神は無形だ、神は無形だとはかり言っている。それで、バーヴァのときこう言つたよ——『マー、此処へ来なさんな。どんな姿をしてくても、この連中はあんたを認めないから——』」

宗派根性に関するこれらの言葉を聞いて、ゴースワミーは沈黙をつづけている。

聖ラーマクリシュナ「ははははは、ヴィジャイは最近とてもよくなつたよ。ハリ、ハリと称えながら地面に倒れてしまふんだよ！」

夕方から朝の四時ころまで、キールタンや瞑想ディヤナをつづけている。今は黄衣を着てね。神像を見るとさつと平伏する！

ガダーダルの学校にわたしといっしょに行つて——わたしが、『ここであの方ガダーダルが瞑想なすつたのだ』と教えるとすぐその場所にひれ伏したよ！ チャイタニヤディヴァ様の絵を見て、また平伏した！」（訳註、ガダーダル——有名なヴィシシュヌ派の聖者）

ゴースワミー「ラーダー・クリシュナの神像の前では？」

聖ラーマクリシュナ「平伏するよ！ それに、その宗派の作法さまりに従っていたよ」

ゴースワミー「では、(ヴィシヌ派の)宗派内でも認められますね」

聖ラーマクリシュナ「彼は、人が何を言おうと、ちっとも気にかけないよ」

ゴースワミー「いえ、そうではありません。そのような人物を受け入れることは、ヴィシヌ派社会にとって名誉である、と申したのでございます」

聖ラーマクリシュナ「わたしのことを、えらく尊敬しているよ。彼をつかまえるのは大変なんだ。

今日はダツカに招よばれ、明日はまた別な処に招よばれて、年中忙しいんだから——。彼の作った協会

(サーダーラン・ブラフマ協会)は大騒動だよ」

ゴースワミー「は、何故でございますか？」

聖ラーマクリシュナ「会の連中が彼に言うのさ——『君は有形神の信者どもと付き合っているね！君は偶像崇拜者だ』と。

それに彼は、とても親切で素直だ。素直すちでなけりや、神さまのお恵みはいただけない」

〔ムクジェー兄弟への教訓——在家生活——前進せよ——アビヤーサ・ヨーガ〕

こんどタクルは、ムクジェー兄弟と話をしておられる。兄のマヘンドラは自分で商売をし、弟のプリヤナートは技師である。彼はいくらか蓄えができたので会社を辞めている。兄の方は三十五、六

才か。彼等の家屋敷はケデティ村にあり、カルカッタのバグバザールにも住居がある。

聖ラーマクリシュナ「(笑いながら) ちょっと真理がわかりかけたからといって、そのまま安心してちゃだめだよ。前進しろ。白檀の木の先にまだまだいいものがある——ほら、銀の山だの、金の山だの——」

プリヤ「はっはっはっはっは。でも、足に鎖がついているものですから、前に進めません」

聖ラーマクリシュナ「足に鎖がついていたって、それがどうしたい？ 心次第だよ。」

心によって縛られもするし、解脱もする。二人の友だちがいて——一人は淫売宿へ行き、一人はバーガヴァタ(神に関する聖典を聴きに行った。はじめの一人はこう思った——『恥ずかしいことだ。友だちは神さまの話を聴いているというのに、自分は何て場所にいるんだろう』後の一人は思った——『阿呆らしい。友だちはいいところで大いに楽しんでるのに、私は何てバカなんだろう!』)そうしたらどうだい、最初の一人はヴィシュヌの使者によって天国ヴァイシクに連れていかれたのに、後の一人は死王ヤマの使者によって地底の地獄へ連れていかれたとき」

プリヤ「その、心というものが、私の自由にならないのでございます」

聖ラーマクリシュナ「どうして! 訓練アヒンサのヨーガだよ。訓練さえすれば、心を向きたい方に向けるようになるよ。」

心は洗濯屋にある布だ。洗濯した後で、赤い染料につければ赤くなるし、青い染料につければ青くなる。どんな色にでも、浸ひたす染料の色になるんだよ。

(ゴースワミーに向かつて) あなた方、何かおっしゃることがありますか？」

ゴースワミー「(非常にへり下った様子で) いえ。お目にかかることが叶いまして——。お言葉は一つ残さず聴かせていただいております」

聖ラーマクリシュナ「神様方に詣つて来なすつてはどうですか？」

ゴースワミー「(大そうていねいに) マハープラブ(チャイタニヤ)を讃<sup>た</sup>えるキールタンを少し、おきかせ願えませんか？」

タクール、聖ラーマクリシュナはゴースワミーに歌をおきかせになった。

わたしの体はどうしてガウルになったのか！

ゴラはプリンダーヴァンの方をみつめ

ゴラ——ガウランガ(ガウル) || チャイタニヤ

両の目より涙はらはら落としぬ

聖なる欲びにガウランガは至福の海に浸り

愛に笑い、泣き、踊り、歌う

森を見てはプリンダーヴァンと思い

海を見ては聖なるヤムナーと思う

自分の足に頭を当てて

内(心)はクリシユナ、外(肉体)はガウル

全てはクリシユナだから、自分の足をクリシユナの足として拝んでいる

〔ラディカ・ゴースワミーにあらゆる宗教の大調和を語る〕

歌い終わると、タクールはこうおっしゃった。

聖ラーマクリシユナ〔ゴースワミーに向かつて〕これ(この歌)は、あなた方(ヴィシユヌ派)にはいいでしょう。でも、もしシャクティ派やゴシユパラ派の人にとつてはどうだろうね！

此処では、あらゆる考えを認めるから、此処には、あらゆる種類の人が来るんだよ。ヴィシユヌ派、シャクティ派、カルタバジヤ、ヴェーダーンティスト、それから当世流のブラフマ協会の会員もね。

あの御方の意志で、いろんな宗教が出来、いろんな考えが出てくるんだよ。

しかしあの御方は、それぞれの胃袋で消化ゴせるものを食べさせて下さる。お母さんは、どの子にも魚のピラフ(バターでいためた魚のませ飯)を食べさせはしない。みんなの胃に合うわけじゃないからね。だから、誰かには味のうすい魚汁をつくってやつたりする。

人それぞれ、生まれつきの性格や理想に応じて、それに合う道を進んで行くんだよ。

バロヤリ(祝祭の一つ)ではいろんな神像が祀られる——そして、いろんな宗派の人がお詣りに行く。ラーダーとクリシユナ、シヴァとパールバティ、シーターとラーマ。別々な場所に別々の神像が飾ってあって、その一つ一つの傍に沢山の人が集まっている。ヴィシユヌ派の人たちはラーダーとクリ

シユナの像の傍にいるし、シャクティ派の人はシヴァとパールバティの傍にいる。ラーマの信者はシーターとラーマの像の傍に集まっている。

だが、どの神様にも関心のない連中は、また話が別だ。売春婦が情夫をホーキで叩いている像もバロヤリでは作ってあつてね、神様に関心のない人たちは、この張りボテをボカンと口をあけて眺めている。そして友だちに向かつて、大声で叫ぶんだよ——『おい、何をそんなところで見てるんだい。こっちへ来いよ！ こっちへ来いよ！』

一同、爆笑した。やがて、ゴースワミーはお別れのあいさつをして帰って行つた。

青年信者たちと共に楽しいひととき——マー・カーリーへの献灯に参列してチヤマラ私子で扇ぐ——母さんと子供——なぜ考えさせる？

午後五時。タクールは西の円ペランダにおられる。バブラーム、ラトウ、ムクジェー兄弟、校長たちが連れだつてそこへ来た。

聖ラーマクリシユナ「(校長たちに向かつて) 偏かたよつたことが言えるかい？ あれらヴィシユヌ派の連中は石頭ガシコでねえ、自分たちの教義だけが正しくて、ほかの宗派はすべて間違いだと思つている。わたしの言つたこと、大そう打撃シヨツクだつただらうよ、ハツハツハツハツ。象の頭はちよいちよい尖とがつた棒で叩かなけりゃね。頭が急所なんだから——(一同大笑)」

こんどは、青年たちを相手に冗談をおつしやつた。

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに向かつて) わたしは、若い連中に菜食の料理だけをあてがうということはしないよ。時々魚の臭いがするスープをすこし出してやる。そうでないと来なくなるからね」

ムクジェー兄弟が、ベランダから離れて庭を散歩しに行った。

聖ラーマクリシュナ「校長に)わたしはいつも、称名ジャバしていたものさ——いつも、三昧に入っていた。これはどういうことだろう?」

校長「(おごそかに) それは、まことにすばらしいことでございます」

聖ラーマクリシュナ「アッハッハッハ、めでたし! めでたし! ところであの兄弟(ムクジェー)は、わたしのことをどう思うだろうな?」

校長「大佐が言っておられますように、あなた様は子供の境地でいらっしやいます。神を見た人は、子供のようになるのでございます」

聖ラーマクリシュナ「幼な子みたいになったり、少年や青年にもなる。少年の境地では、ふざけたりはしゃいだりして軽口もたたくさ。青年の境地のときは、獅子のような態度で人に教える。

お前、(このことを)あの兄弟にわからせてやってくれ」

校長「はあ、いえ、私が説明することはないと思います。あの人たちにそれがわからぬ筈はございません」

聖ラーマクリシュナは、青年たちとまたふざけたことをおっしゃってから、一人の信者に向かつて、

「今日は新月だよ、マーのお堂に行け！」とおっしゃった。

夕暮れになって、献灯の鈴の音がきこえてきた。タクールはブラームに、「行こう。サ、行こう、カーリー堂に！」とおっしゃって、ブラームといっしょにお行きになった。校長もついて行つた。ハリシユがベランダに坐つたままのを見てタクールは、「この子はまた、パーヴァになっている」とおっしゃった。

境内を通つて行きがてら、聖ラーダーカーンタ堂の献灯をすこし拝見した。その後で、マー・カーリーのお堂へ向かつて行く。歩きながら手を合わせて、タクールは宇宙の大実母を呼んでいらつしやる——「お、マー！ お、マー！ ブラフママイー！」お堂の正面テラスに着くと、ひれ伏してマーにごあいさつをなさる。マーへの献灯が行われていた。タクールはお堂の中にお入りになり、チャマラ(私子)扇ハシラテの一種でマーを扇がれた。

献灯は終了した。献灯に参列した人は皆、同時にひれ伏してマーを礼拝した。聖ラーマクリシユナもお堂の外に出られてから礼拝なさつた。マヘンドラ・ムクジエーたちも礼拝した。

今日は新月である。タクールは半三昧状態になられた。法悦に酔つていらつしやる！ ブラームに手をとられて、酔っぱらいのようにフラリフラリと自室にお戻りになった。部屋あかの西ベランダに灯りがつけられた。タクールはそのベランダに出て少しの間坐られた。「ハリ、オーム！ ハリ、オーム！ ハリ、オーム！」とつぶやいていらつしやる。それに加えて、いろいろな種類の秘密真言を唱えておられる。

間もなく、タクールは部屋のいつもの場所に、東向きにお坐りになった。まだ法悦に恍惚となっておられる。

ムクジュー兄弟、バブラームはじめ、信者たちは床の上に坐っている。

〔Origin of Language (言葉の源) — The Philosophy of Prayer (祈りの哲学)〕

タクールは、半三昧状態でマーと話をしておられる——「マー、声に出して話したときだけ聞いてくれるのかい？——そんなはずないよね。

話すって何なんだい？——単なる合図のようなもんさ！ 誰かが、『私は食べる』と言う——そして誰かは、『そんなこと！ 私は聞きたくない』と言う。

そうだね、マー！ もし、『私は食べる』と言わなかったとしたら、腹が空ついていない、ということかな？ あんたに声を出して言うときだけあんたは聞くが、心の中でじれったい程思っている、あんたは聞かない——そんなことあるもんか。

あんたは、ありたいように、ある——それなのに、何故話すのか——なぜ祈るんだろうね？

ああ！ させる通りにしているだけさ！

ヤー！ 何だか、こんがらがってきた！ 何故わたしに考えさせる！

タクールは宇宙神イシュワラと話をしておられるのだ。信者たちは感動して声もなく聞き入っている。

〔サムスカーラと苦行が必要——信者たちへの教え——サードウに奉仕すること〕

やがてタクルルは、信者たちの方に眼を向けられた。

聖ラーマクリシユナ「(信者たちに向かつて)あの御方をつかむには、ある種のいい性質サムスカーラが必要だ。

すこし、何かし続けていかなければね。つまり、行レをね。今生にでも、前生にでも——。(訳註、

サムスカーラ——前生から引き継いだ性質)

ドラウパディーが着物をはぎ取られようとしたとき、死に物狂いで泣き叫んだ。(ドウルヨーダナ王は法廷でパインドウ兄弟の妻ドラウパディーを恥ずかしめるために、彼女の着物をはぎ取るように命じた)その声を聞いて神タクールが現れて下すった。そして、『お前が誰かに着物を献上さしあげしたことがあるか、どうかそれを思い出して見なさい。——そうすれば今、恥ずかしい目に合わないでもすむだろう』とおっしゃった。ドラウパディーは言った。『アー、思い出しました。一人の聖者リシが沐浴していらつしやつたとき、お腰巾が流れて行ってしまいました。私は自分の着物を半分半分に裂いて、その方に差し上げました』すると、神タクールはおっしゃったよ。『それならもう、お前は何の恐れもない』

校長は、タクルルの席の東かたの足敷の上に坐っている。

聖ラーマクリシユナ「(校長に)お前、いまわたしの言ったこと、わかるね」

校長「はい。サムスカーラのことです。ごいませす」

聖ラーマクリシユナ「じゃ、もう一度くりかえして言ってみる」

校長「ドラウパディーが……(校長、さっきの話をくりかえす。ここでハズラーが入ってくる)」

## ハズラーさん

ハズラーさん(訳註8)は、ここにもう二年も滞在している。彼はタクルの生誕地カマールプクルの近くにあるシオル村ではじめてタクルにお会いした。一八八〇年のことである。この村に、タクルの甥フリダイ・ムコパッタエ氏(いとこ)タクルの従妹(いとこ)ヘマンギニの息子の家がある。タクルがフリダイの家についておられた時のことであつた。

シオルの近郊、マラゴル村にハズラーさんは住んでいた。彼はそこに、土地その他の不動産を所有している。妻子もいて、相應の生活を送っていた。また、いくらか借金もあつた——多分、千タカぐらいだろう。

若い頃から、彼には離欲(ヴァイライキヤ)の気持ちがあつて——サードウはいないか、信仰者はいないかと、あちこち心掛けて探し回っていた。南神村(ドゥルネシヨル)のカーリー殿に初めて来たとき、タクルは彼の信仰状態をごらんになり、郷里の馴染みだからとおっしゃって、ご自分のところにおいて面倒を見ることになつた

(訳註8) ハズラー——プラタブ・チャンドラ・ハズラーは三十八才くらいの時に、ドッキネーシヨルで靈性の生活を送るために妻子を捨てた。議論好きで、他人に対して批判的だったが、ラーマクリシュナへの並外れた信仰を持っていた。タクルは冗談交じりに、「ハズラーは筋書きを面白くするためにいるんだよ」とおっしゃっていた。カマールプクル近くの生まれ故郷マダゴトに戻って、一九〇〇年(ベンガル暦一三〇六年チヨイトロ月)に六十三、四才で亡くなった。

のである。

ハズラーは智者的な気持ちの人だ。タクルルの信仰ぶりや青年たちへの熱い愛情については、否定のであった。時々タクルルを偉大な魂であるとして尊敬するが、またすぐ、あたり前の人間じゃないかと思ったりするのである。

彼は、タクルルの部屋の南東側ベランダに座を組んでは、数珠マツライをつまぐりながらマントラを唱えるのに大部分の時間を費やしていた。ラカールはじめ信者たちが、ろくにジャパ(マントラを唱えること)をしないと行って、よその人に悪口ひなんを言っている。

彼は宗教的慣習にやかましい。そういつた規則や習慣をこまごまと行うことが、潔癖症の彼にとつての日常となっていた。年令としは三十八才である。

そのハズラーさんが今しがた、部屋に入ってきた。タクルルは前三昧状態になりかかつて、話をしておられた。

〔神は祈りを聞いて下さるか？ 神のために泣くほどなら聞いて下さるだろう〕

聖ラーマクリシュナ(ハズラーに向かつて) お前のしていることは正しいんだが——でも、ツボにはまっていないよ。

他人のあら探しをするな——虫けらのあらさえも探すんじゃない。聖者ローマシヤ(訳註)のように、人のお手本になるんだよ。神の愛を求めて祈るときに、そのこともちゃんとお願いしろ——他人のあら探

しをしなくなるようにと」

ハズラー「(信仰を)祈れば、神様は聞いて下さるんでしょいか？」

聖ラーマクリシュナ「絶対、必ずさ！ 正しく祈ればね——誠心誠意、心の底から祈ればね。世間の人は妻や子のために泣くが、神さまを求めてどれほど泣くだろうか？」

〔以前の話——カマールブクルの人が妻の病気でガタガタ震える〕

「郷里で、ある人の女房が病気になった。治らないかもしれないと思って、その人はガタガタ震えはじめた——気絶しそうだったよ！

こんなふうに、神を求めてなれたらねえ！」

ハズラーは、タクールの足の塵をいただこうとした。

聖ラーマクリシュナ「(びっくりして身を縮め)——何だ」

ハズラー「そばにおいて下さるお人の、お御足の塵をいただいてはいけませんか？」

聖ラーマクリシュナ「神さまを喜ばせろ。そうすりゃ皆によるこばれる。それが喜ばば世界が喜ぶ——神さまがドラウパディーの鍋から野菜をとって食べて、『私は満足した』とおっしゃった。

(訳註9) ローマシャ——聖仙リシヴィヤーサの弟子。機織り職人ウイーバーの息子で、ヴィヤーサの五人の弟子のうち

ローマシャだけはバラモンではなかった。ヴィヤーサの話の聞くと嬉しさのあまり、髪が逆立ったそうである。

その瞬間、全世界と全生物が同じように満足した——腹いっぱいになった！　だが、聖者たちが食べた場合は世界が満足するだろうか——腹いっぱいになるだろうか？」

タクルは、人びとに啓示を与えるために何ほどの仕事をしなければならない、ということを言われたのであろう。

〔以前の話し——バニヤン樹台にいた出家僧の礼拝の仕方〕

聖ラーマクリシュナ（ハズラーに） 智識を得た後でも、人びとを導くために祈祷やそのほかの行をするものだよ。

わたしはカーリー堂にお参りに行ったり、この部屋にある絵にいちいちあいさつする——だから、ここに来る人はみんな同じようにする。それに、こういうことが習慣になると、それをしないと、どうも心がソワソワして落ち着かなくなる。

バニヤン樹台で出家僧を見た。敷物の上に師の履き物が置いてあった。そして、その同じ敷物の上にシャーラグラーマ（石でできた神のシンボル）を置いている！　そして拝んでいる！　わたしは質問したよ。『これほど深い智識（グル即ち神なりという悟り）を得ているのに、どうして礼拝などするのかね？』すると出家僧は答えた。『何でもしますよ。これもあれも同じこと。この足（師）に花を供える時もあり、あの足（シャーラグラーマ）に花を供えるときもあり——』

肉体があるうちは、行為を捨てることはできない。（湖の底に泥があれば、アワが上がつてくる）

〔The three stages (三つの段階)——聖典、師グルの口、修行、そして Goal (目的地)、悟見ブライヤクシヤ〕

〔(ハズラーに) 一の智識があれば多の智識もある。お経や聖典を読むだけで何になる?〕

聖典には砂と砂糖が混じっている。砂糖だけ取り出すのは大そう難しい。だから聖典の肝心なところ(核心)を、サードウグルや師グルの口から聞かなければならないんだよ。そうなれば、もう書きものなどには用がない。

手紙で用向きを書いてよこす——五シア(45 kg)のサンデシュを送って下さい。それから、これこれの服を一着送って下さい。ところが、その手紙を失くしてしまった。用向きもわからなくなった。必死になって四方八方探し回る。やっとのことで手紙が見つかって読んでみると——『五シアのサンデシュと服一着送れ』用がはつきりわかったら、もう手紙は捨ててしまおう。もう必要がないからね。ここではサンデシュと服を用意すればいいんだ。(訳註、サンデシュ——チーズ入り砂糖菓子)

(ムクジェー、バブラーム、校長に向かつて) できるだけ多くの情報をしらべて、それから飛び込むんだよ。壺が池のどこに沈んでいるのか、その場所をよく見極めて飛び込まなけりゃいけない。

聖典の肝心なところを師グルから教わったら、修行をすることだ。この修行が正しく進んでいけば、じ

(原典註2) 肉体をまとった者たちにとって、活動をすべて止めることは不可能だ

しかし、仕事の結果を放棄した人は、真まことの離欲者である —— ギーター 18・11 ——

かに神を見る(悟見)ことができる。

飛び込んでこそ、ちゃんとした修行になるんだよ！ どっかり坐りこんで、聖典の内容をアレコレ議論ばかりしていて何になるね？

阿呆どもの道中話(道中の話ばかりしていて一歩も踏み出さない)——それだけで死んでいく。馬鹿は死ななきゃ治らない、飛び込まないんだからね！

飛び込んでもフカヤワニの危険がある。——つまり、色欲や怒りに堕ちる心配がある、というかも知れない。だから、ウコン(香辛料および黄色の染料)を体に塗って飛び込め。あいつらは近寄ってこないから——。識別と離欲がウコンだよ」

### 以前の話——聖ラーマクリシュナのプラーナ、タントラ、ヴェーダによる修行

〔五聖樹パンチャパテイの杜、ベル樹の下、チャドニーでの修行——トーター・プリーのもとで出家する(一八六六年)〕  
 聖ラーマクリシュナ〔信者たちに〕あの御方はわたしに、いろんなかたちの修行をさせなすった。最初はプラーナ式、その後でタントラ流、それからヴェータ流——。最初は五聖樹パンチャパテイの杜で修行したものだよ。トゥルシーの木を植えて、その茂みのなかに坐ディヤナって坐ディヤナしたものだ。時々こらえきれなくなつて、ムマー! マー!ムと呼び叫んだものだ。ムマー! ラーマ!ムと叫んだりもした。

ラーマ、ラーマムと呼んでいるときは、身も心もハヌマーンのようになつて、尻プシヤ尾を結びつけて坐プシヤっていたつけ！ まあ、氣狂いみたいになつていたんだね。その頃は祈プシヤ禱プシヤをするとき、絹の衣を着

で喜んでいたものだ——祈<sup>プリヤ</sup>禱<sup>ダ</sup>がとても楽しかったんだよ！

タントラ流の修行はベルタラでした。そのときは、神聖なトゥルシーの木も、サジナの実も、区別がつかなくなっていた！（訳註、サジナ——和名はナンバンサイカチと云いインドでは一般的な樹木。細長い食用になる実をつける）

その状態のときは、前の晩のシヴァニー（ドウルガー）のお下がりの残りを——一晚中出しつ放しになつていたので蛇なんか口をつけたかもしれないやつを——それを食べて生きていたんだよ。

犬の背中に乗って、犬の口もとにルチをあてがって食べさせて、その残りを自分で食べたりもしたよ。シオルボン、ヴィシュヌモヨン、ジヨゴト（大宇宙、ことごとくヴィシュヌなり）。地面の水たまりにたまつた水で口をすすいで清めたものだ。——池から地面の水たまりに水を運んで、たまつた水で口を清めていたんだよ。（訳註——礼拝の前に口に水をそいで清める儀式、アーチャマナのこと）

無知無明をなくさないかぎりダメだ。だから、わたしは虎になつて、無明を食い尽くしたんだよ！  
ヴェーダ流の修行をしたときは出家僧<sup>サニヤシ</sup>になつた。そのときは、チャドニー（参道の石だたみ）に横になつて寝たものだ。そしてフリダイに言ったものさ。——『わたしは出家僧<sup>ほうざん</sup>になつたんだから、チャドニーでごはんを食べるよ！』

〔修行時代における様々な靈視と宇宙の大実母<sup>マ</sup>にヴェーダーンタやギターについて教えられたこと〕  
〔（信者たちに向かつて）体を投げだして祈つたものだよ！ 大実母<sup>マ</sup>にこういつて頼んだ——『わたし

は何も知らない子供だ。あんたがわたしに教えておくれ——ヴェエダ、ヴェエダーンタ、タントラ、いろんなお経にいったい何が書いてあるのかを——」

マーは答えてくれたよ。ヴェエダーンタの根本義は——ブラフマンは真実在、宇宙世界は虚仮<sup>こげ</sup>。ヴェエダにサッチダーナンダ・ブラフマンのことが書いてあるが、それと同じものをタントラではサッチダーナンダ・シヴァと呼び、プラーナではサッチダーナンダ・クリシュナと称<sup>よ</sup>んでいる。

ギーターは十回繰り返し言ってみると核心がわかる。つまり、ターギー(放下)、ターギー!だ。(訳註、ターギー——虚仮<sup>こげ</sup>を放下<sup>おとし</sup>すること。無執着であること)

あの御方をつかんだとき、ヴェエダも、ヴェエダーンタも、プラーナやタントラも、どんなに低く見えたことか——。

(ハズラーに)そのときは、オームを称えることもできなかった。どうしてだかわかるかい? 三昧からずつと低く下りてこないと、オームが発音できないんだよ。

実在<sup>かみ</sup>を直視するとこれこれの状態になる、と聖典にかいてあるが、わたしの場合もそれが一つ残らずその通りになったよ。幼児<sup>こども</sup>のようになり、気狂いのようにもなり、食屍鬼<sup>ビジャナヤ</sup>のようにふるまったり、(石のような)無生物のようにもなった。

それから、聖典に書いてある通りのいろんな光景を靈視<sup>み</sup>た。

あるときは、宇宙が火花で充ち満ちているのを見た。

あるときは、あたり一面が水銀の入海のように、ギラリギラリと輝いていた。宇宙全体が銀を溶か

したように見えたこともある。

時には、すべて全体が松明の火のように焰々あかあかと燃えていたよ！

とにかく、聖典にあることとピッタリだ」

〔聖ラーマクリシュナの境涯——絶対と相對の結合——永遠遊戯ヨガ三昧〕

「それから、わかった。あの御方ご自身が、人間や生き物にも、この世界にも、二十四の存在原理にもなっていないことがね！ 屋根に上がって、またハシゴづたいに下りてくる。上がったり下ったり。ウーン！ まあ、何という境地だったろう！ 一つの状態が消えると、すぐ又別な状態がやってくる。脱穀機の動きみたいに、片方の脚が下がると、もう一方の脚が上がる。

心が内奥うちに向いて——つまり三昧状態のときもあの御方を見たが、外の世界に心が向いたときでもあの御方を見ていた。

鏡のこちら側を見てもあの御方！ 反対側を見てもまたあの御方だ」

ムクジエー兄弟、バブラームはじめ信者たちは深く感動して、咳払い一つたてずに聞き入っている。

**以前の話——シャンブー・マリックの無執着——偉大な魂の保護**

聖ラーマクリシュナ（ムクジエーたちに）大佐キヤプデは正しい修行者の状態だ。

財産や権力があっても、それに対して執着が増すばかりとも限らない。シャンブー（マリック）が

よく言ったものだよ。『フリダイ、(出立の)荷造りはすんだよ』と。わたしは、『どうして、そんな縁起でもないことを言う!』と叱ったものだ。

するとシャンブーは、『いえ、すべてを投げ捨ててあの御方のもとへ行く、という意味です』と言う。神さまの信者は、何も恐れることはない。信者は神さまの身内なんだからね。あの御方は信者たちを引つ張り寄せて下さる。ドウルヨードナたちがガンダルヴァのところへ捕まったとき、助け出してくれたのはあのユディステイラだった。『血族みうちのものがあのような境遇にいることは、我々の恥だ』と言って――』

〔神殿のバラモンたち――彼らに熱心になるよう教える〕

夜の九時ころになった。ムクジエー兄弟はカルカッタに帰る準備をはじめている。タクールがちよつと立ち上がつて部屋やベランダを歩きまわつておられると、ヴィシユヌ殿からサンキールタンの歌声がお耳に入ってきた。タクールにたずねられて、一人の信者が答えた。「あのかなにラトウトハリシユが入っています」タクールは、「おう、そうかい」とおっしゃつた。

タクールはヴィシユヌ堂に行かれた。信者たちもお供した。タクールは聖ラーダーカーンタの像の前に額ぬかずいて礼拝なさつた。

タクールがごらんになると、神殿のバラモンたち、料理する人、供物を捧げる係りの人、客を接待する係りの人、および、その他の召使いたちも大勢いっしょになつて称名ナムキールタンを歌っている。

タクルルは少しそこに立ち止まって彼等をはげまされた。

境内を通って戻られる途中、信者たちにこうおっしゃった——

「ね、あの連中のうち、何人かは淫売窟に行くし、何人かは神前の道具を磨くわけだよ！」

部屋に戻ると、タクルルはご自分の席にまたお坐りになった。サンキールタンを歌っていた人たちが入ってきて、タクルルにごあいさつした。

タクルルは彼等におっしゃる——「金のために汗をかいて働くように、ハリ称名の踊りや歌も、汗をかくほど熱心にしなけりやだめだよ。」

わたしは、お前たちといっしょに踊ろうと思ったんだよ。ところが行ってみると、とてもうまい具合にいってるので遠慮した。味もトロミも上々だし、おまけに薬味までピリリときいていたし——。

(一同大笑)

お前たち、時々あんなふうにしてハリ称名をするといいよ」

ムクジェーたちはタクルルにごあいさつして帰って行った。

タクルルの部屋の真北にある小さいペランダのきわに、ムクジェーたちの乗る馬車がきて停まっていた。車のランプが明るく光っていた。

〔信者たちの別れとタクルルの思いやり〕

タクルルは、そのペランダの北東隅に北を向いて立っておられる。一人の信者が、道がよく見える

ように明かりを持つてきた。帰る人たちを案内するためであろう。

今日は新月——闇夜である。タクールの西側にはガンガー、正面には音楽塔、花園、客殿、タクールの右側は正門に通じる道である。信者たちは、ひとりひとりタクールの足もとに額をつけて拝礼してから馬車に乗った。タクールは信者の一人に向かつて、「お前、あれ（ナレンドラ）のために仕事を見つけてやるように、イシャンに言ってくれないか？」とおっしゃった。

馬車に人が乗り過ぎているのをご覧になって、馬が苦勞をするのではないかとタクールはおっしゃる——「車に人が多すぎるようだが、大丈夫かい？」

タクールは、ずつとそこに立つておられた。その信者思いのお姿を振り返り、振り返り、彼らはカルカッタに向けて出立した。